

## 扶助に据える

「扶助に据える」ということは、一体どういうことだろうか？我々はこのことを「馬を手の内に入れる」という言葉で理解してきているが、これは同意語である。すなわち、馬を「扶助に据える」ということは、馬を腰・脚の推進扶助によって後方より前方へ押し出すようにして、馬の口と騎手の拳との間にコンタクトを得ることで、これを我々は「依倚」という。

正しくかつ確実な依倚をとっている馬の状態とは、馬自身、心身共に全く緊張が解けている状態で、かつ騎手の扶助（腰・脚・拳）に完全にしがっている状態をいう。そして、この際馬は自ら楽に首を伸ばしつつハミを求め、正しくかつ確実にハミをくわえている。そして、その頭頸は項を最頂点に、鼻面は垂直線上よりわずかに前方にあるべきである。これが正しく依倚を保っているときの馬の頭頸姿勢であるが、これは馬の調教段階や体型によって、その姿勢は異なる。

よくある過失は、騎手が腰・脚の推進扶助を怠って、ただ手綱のみで馬を扶助に据えようとするものである。そのような状態では馬は身体を硬くしてハミに対抗する。その結果、馬は頭をを上げたり、上下に振ったり、背をそらしたり、さらには後肢を逃したりする。そのほか、馬は巻き込んだり、舌を出したりもする。これでは馬は正しい依倚をとっているとはいえない。これらは騎手の誤った扶助操作から起こるもので、十分注意すべきである。我々はいつどんなときでも、馬に正しくかつ確実な腰・脚の推進扶助を行って、正しく馬の後軀に作用させることが必要で、これが騎乗する際の出発点である。すれ故、騎手は馬を扶助に据えることを学ばねければならない。

正しくかつ確実な依倚をとっている馬の停止の状態とは、馬は四肢を均等にそろえ、負重している。そして馬の頭頸は項を最頂点に、鼻面は垂直線上よりわずかに前方にあり、歯をきしむことなく柔らかくかつ確実にハミをくわえている。そして尾は自然にたれている。この際騎手は腰を張り、鞍の左右均等に座って馬をハミに押し出しておく。そして、それを受けて両拳は左右均等に保持し、馬の姿勢を維持しておく。

もしこの際馬が後肢を側方へ逃がした場合は、腰・両脚にて馬を半歩または一步前進させ、再び馬の四肢を均等にそろえる。馬が後退したりするのは、騎手の拳が強すぎたか、または腰・脚の推進扶助が足りなかったためである。停止の際に特に大切なことは、馬が停止するや否や内方拳をしこし前へ出し、馬に譲りを与え、同時に外方拳にて依倚を特に保っておくことである。そしてさらに、腰・両脚にて馬が停止の状態を維持する程度に馬をハミに押し出しておく事である。

一方、行進中においては、騎手は手綱を全く伸ばした状態または長めの手綱で乗られている状態の馬を扶助に据えたり、さらには歩調が乱れている馬を再び扶助に据えたりする。

すなわち、馬が手綱に対して馬体を硬くするときは、拳を一定に保持して馬の項およびガクを譲るまで腰・足にてより前方へ推進する。このような場合に有効なのは常歩にて輪乗り騎乗を行うことである。すなわち、内方脚と内方拳にてわずかに内方姿勢をとらせながら、かつ内方脚にて馬を外方手綱の方へ推進することである。この際特に大切なのが、馬が方を屈折させて馬体を外側へ逃がさないように注意することである。

そのためには、外方手綱と外方脚の制限扶助が大切である。このような騎乗はすでに説明した「騎手の作用」の項にその方法を述べているのもう一度読み直してもらいたい。さて、もしこのような方法で馬が譲ったら、拳をすぐ譲るべきであり、特に内方拳をわずかに前方に出す。

しかし、手綱がブラブラになるほど弛める必要はなく、数ミリで馬にそのことが解るほどの弛めで十分である。そして、その後内方脚で馬を外方手綱の方へ押し出し、それを外方手綱で受けつつ再びうまを輪線上へ誘導し、さらに前方に馬を推進することが併せて大切なことである。そして、一定の活気ある尋常歩度にて馬を活気よく歩かせる。このようにして馬は再び活気のあるテンポで輪線上を行進するようになる。

ここでひとつ注意すべきことは、馬の項およびガクの硬さを取り除くために停止させて行うことである。これはあまり望ましくなく、むしろできるだけ行進中に行うほうがよい。もし停止の状態で行う場合は、むしろ馬が十分に項およびガクが譲っているかどうかを確かめるという目的で行うのであれば悪くはない。

そして、この際騎手は馬の頭頸姿勢を決して手綱のみで行うべきでわないということを十分に留めておくべきである。あくまでも腰・脚による推進扶助を伴っての手綱扶助操作であるべきである。

「扶助に据える」ということは、我々が騎乗する際最大切な事であり、ある意味では最終的な目標でもある。もし馬が完全に自分の手の内に入っていれば、その馬は我々の意のままに自由自在に動くであろう。しかし、実際は馬というものはなかなか自分の思った通りに動かないものである。何かしらの違和感を与えるのが大半である。しかし、この違和感を取り除き、自分と馬とを一体にさせることができれば、これほど楽しい事はない。もしそれができたら本当に楽しい乗馬ができるであろう。そして、さらにより緻密な馬術的な要素が加わったなら、真の馬術の醍醐味を味わうことができるだろう。それ故、我々は馬を「扶助に据える」ことを学ぶべきである。

ひとつの例を挙げると、よく初心者が一頭の馬に乗っていて、それはそれなりに動いているが、その馬に先生

が乗ると、それまでの馬が別の馬のように見事な動きを示すことがある。これなどは先生が馬を「扶助に据える」ことを知っているからなのであり、その先生にとってはそれほど労力を要していないのである。このようなことが、ある意味では馬を「扶助に据える」というひとつの例と考えれば、この項の意味が多少なりとも理解してもらえるのではないかと思う。

D S Tコラムへのご質問・ご感想をお待ちしております。